



松井 天一さん
Matsui Tenichi

〔仁田子区〕

まつい てんいち / 風景画家。
日展に通算11度入選。2018
年入賞作品「川原風景」(井
戸江峡)を町に寄贈。町生涯
学習センターにて展示中。

甲佐の自然が見せる美しさを キャンバスに描き出す

「私自身、緑川が育む豊かな甲佐の自然の中で生まれ育ったので、その美しさを描いた作品を日展に飾りたいという思いで描いています」と話すのは、風景画家の松井天一さん(仁田子区)。

110年以上の歴史を持つ日本を代表する美術展覧会の日展(日本美術展覧会)に通算11度入選しており、井戸江峡の朝の情景を描いた入賞作品「川原風景」(井戸江峡)を12月6日に町へ寄贈した。

松井さんが風景画の道に入ったきっかけは、恩師の故本田建二郎さんと共に甲佐絵画クラブを立ち上げたことだという。中学生のときに応募したポスターが入選して以来、絵を描くことを続けていた松井さんは風景画を描く本田さんに師事して本格的に描くようになった。

風景画はありのままをスケッチするのが基本で、同じ場所でも、季節や時間、見る人の心情によって見え方が異なるという。松井さんも、現地の空気感を絵に表現するため井戸江峡へは何度も足を運んでいる。

一方で、構図や色使いには創意工夫が必要で、主役となる岩や川の流れを引き立てるために配置や色彩は緻密に計算されている。「描いている中で色を塗りなおしたり、配置を変えてみたりと試行錯誤を繰り返しています。キャンバスの絵が元絵と変わっていることも少なくありません」と笑顔で話す松井さん。

日展への応募は50代中ごろから続けており、これまで井戸江峡を流れる緑川の水の情報テーマとして描き続けてきた。「作品は冬の早朝、山影で陽が差し込む前の井戸江峡を流れる緑川の澄みきった水を描いています。浅瀬から深みへと色が移り変わる様を何度も色を塗り重ねて表現しました。井戸江峡は生涯描き続けたいテーマですね」と語る松井さんの筆は新たな作品を描き続ける。

広報 こうさ

2020年(令和2年) 1月号
通巻606号